

岩手県の野菜産地

～ 高冷地の野菜栽培 ～

岩手県園芸試験場

高橋 慶一

1. 本県野菜栽培の概況

本県の耕地面積は水田89,128ha, 畑51,893ha, 樹園地4,878ha(昭44県統計)であるが, このうち畑は主として盛岡以北の県北地帯に多い。この県北地帯は, 以前は岩手町を中心とした南部かんらんの主産地もあったが, 麦類, 大豆その他雑穀類の栽培が大半で, その後ビートが一時栽培されたが, 概して生産所得が低い地帯である。

近年飼料作物, 畑稻, 一部に特用作物, 野菜が導入され, 作物構成が著しい変化を見せているが, 畑作地帯振興は本県農業の重要課題である。

その一環として昭和40年から県, 県経済連, 県中央会が「そ菜集団産地造成推進協議会」を作り, 主産地形成を推進しているが, ここ2～3年順調な伸びを示し, 米作の生産調整とからんで, 栽培意欲は高まりつつある。

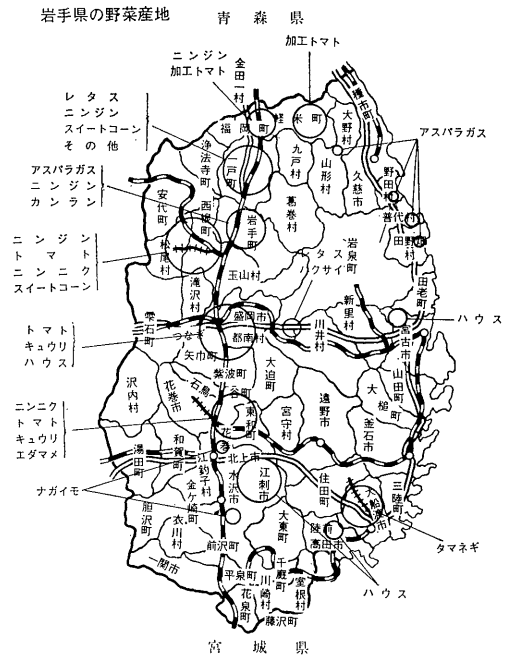
しかし, その規模は未だ小さく, 統計上の野菜栽培面積は約16,000haであるが, そのうち販売野菜の作付面積は約2,000haである。

一方, 県内青果市場の取扱高は, 昭和43年度の調査では56億4,800万円です, このうち野菜は29億4,600万円であるが, 16億円は県外からの移入野菜で占められ, 県内の自給率は50%にも達しない

これらの移入野菜の品目・月別移入量を見ると, 品質的に良質なものが生産できない甘しょ, 時期的に生産の無限なキュウリの促成もの, 1月から5月にかけてのカンラン, 県内生産の少ないスイカ, タマネギなどが主なものであるが, 時期的に県内でできる品目も多く, 県内の自給率を高めることも一つの課題である。

2. 本命は露地野菜

大都市の人口増加にともない, 野菜の需要も増加しつつあるが, その需要の動向は, 個々の種類の季節的需要もさることながら, 周年需要の傾向が強くなってきている。そこで, 立地を活かした生産によって, 全国的な観点からの周年生産によ



って, その需要に対応しなければならない。このような観点から本県の野菜生産は, 夏季涼冷な立地を利用し, 夏～初秋における野菜の生産で, 暖地では生産できない種類を生産することにある。

現在産地形成を進めている品目は, 夏秋キュウリ, 夏秋トマト, カボチャ, スイートコーン, エダマメ, ハクサイ, レタス, ニンニク, タマネギ, 長芋, 短根ニンジンなどで, その他サヤエンドウ, インゲンなども産地化が進められており, 短根ニンジンは国の指定産地が2カ所ある。

夏秋キュウリ, 夏秋トマトは, 主として盛岡から北上市までの東北本線沿線に産地があるが, 本県の夏秋キュウリは, 大産地である福島産よりも品質がすぐれ, 特に日持がよいということで市場の好評を博し, 栽培面積は43年30ha, 44年65haと急激な伸びを示している。

夏秋トマトは, 夏秋キュウリほどの伸び率は示していないが, 漸増の傾向で, 選果機を備える農協もみられるようになり, りんごの選果機の有閑期を利用して農協もある。

短根ニンジンは, 昨年価格が異常に高騰を示したことから, 栽培面積が急激に増加し, 指定産地の岩手郡, 二戸郡を中心に昨年の倍近い約250haの面積がある。北海道ものの出荷最盛期前に出荷するのが狙いであるが, 施肥, 播種から間引(最

終は手間引)、収穫、洗滌と機械化栽培の容易な野菜であり、当場の成績では10a当り約10人ですみ、産地の集団化がより進めば、導入される可能性が大きい。現在、指定産地の大型洗滌機のほか、小型の洗滌機がかなり利用されている。

レタス、ハクサイは、高冷地での7~8月出荷が主で、栽培面積は未だ50haに達しないが、二戸郡一戸町奥中山(標高450~500m)、下閉伊郡川井村区界(標高700m)が主産地である。最近県中部の平坦地で4月中旬播種のマルチ栽培が行なわれ、好成績を取めたことから、この作型もかなり伸びるものと思われる。

二戸郡一戸町奥中山は、岩手郡松尾村とともに本県輸送野菜の主要産地で、戦後開拓され、耕地約1,330ha、転家戸数491戸で約半数が酪農を基幹としている。昭和36年に加工用アスパラガスが導入されたが、本格的な野菜栽培が行なわれたのは昭和40年以降であり、農協が積極的に乗出したのは昭和43年で、産地としての歴史は極めて新しい。

しかし昨年度の農協の販売実績は出荷量1,740t販売額6,621万円、業者も含めると、この地域の総生産額は13,500万円と推定されている。

この地区で栽培されている品目は、カンラン、スイートコーンがそれぞれ60ha、馬鈴薯50ha、レタス、ダイコン各40ha、加工用アスパラガス30ha、短根ニンジン、ハクサイ各20haのほかカボチャ、グリーンアスパラガス、インゲン、サヤエンドウなど10品目以上におよび、ある程度作目の整理が必要である。

また県北地帯は火山灰土壌が大半で、磷酸欠乏土壌であり、酸性も強く生産力の低い土壌が多く、土壌改造の効果が極めて高く、県農試の試験結果では、改造後6作目でもなおその効果が持続しており、栽培農家には積極的に土壌改造を行なうよう指導している

3. 加工野菜

加工野菜として契約栽培されている主な種類はアスパラガス、加工トマトであるが、その他ごく小さい規模で、漬物用ダイコン、エダマメなどの契約栽培も行なわれている。

アスパラガスは収穫面積350haで、毎詰生産高では北海道に次いで多いが、定植後成令株に達するまでの年数が長いことや、生産量が期待したよりも少なかったことなどもあって、昭和36年から導入されたわりには、開田などによって廃耕した園もあり面積の伸びが少ない。しかし最近の米の生産調整にともなって、再び栽培意欲が高まってきている。

産地は岩手郡岩手町、西根町が中心で、県北沿岸地帯にも若干の栽培地がある。

アスパラガスが一般的に低収の原因として、栽培地の土壌が火山灰で瘠薄なうえに、最近はカッパン病の被害も大きい。特に肥培については、化学肥料のみに偏重せず、有機質、磷酸の増施、酸性土壌の矯正などが必要である。当場の試験では堆肥、磷酸増施の効果が大きく、三要素の増施は若令株では効果があるが、5年以上の成令株では、特に窒素の多施の害が認められている。

加工トマトは、二戸郡福岡町と隣接する九戸郡軽米町が主な産地で、岩手郡松尾村も以前は相当の面積があったが、パッカー側の生産調整で激減し、県全体では現在の栽培面積は約70haである。栽培は全部無支柱で、松尾村を除いてはマルチ栽培が行なわれている。

第1表：リンサン投入量と効果、持続効果(岩手農試)

区名 (改造資材投入量)	第1作	第2作	第3作	第4作	第5作	第6作
	スイートコーン 有効雌穂重量比	小 子実重量比	白 結球重量比	短根人參 根重量比	レタス 結球重量比	白 結球重量比
1. 未改造(無堆肥)	100%	100%	100%	100%	100%	100%
2. リンサン50kg(〃)	145	136	370	127	126	123
3. " 100kg(〃)	148	181	410	129	172	143
4. " 100kg(堆肥)	162 *1,066kg*	186 532kg*	405 *5,069kg*	118 *3,483kg*	259 *4,803kg*	155 *4,344kg*

資材の投入は初年目だけ、りん酸は過石50・よりん50。

*は10アール当たり収量、施肥・管理は作物ごとに同じ。

第2表：第1表における農家収入

区名 (改造資材投入量)	6作合計		
	販売価格	農家収入	同比%
1. 未改造(無堆肥)	271千円	109千円	100
2. リンサン50kg(〃)	396	183	167
3. " 100kg(〃)	448	212	193
4. " 100kg(堆肥)	513	240	219